

Botchan Chapter 9 (Natsume Sōseki)

うらなり^{くん}君の送別会^{そうべつかい}のあるという日の朝^ひ、学校^{がっこう}へ出たら、山嵐^{やまあらし}が突然^{とつぜん}、君先^{きみせん}だっではいか
ぎん^{ぎん}が来て、君^{らんぼう}が乱暴^{ごま}して困るから、どうか出るように話^{はな}してくれと頼^{たの}んだから、真面目^{まじめ}に受
けて、君^きに出てやれと話^{はな}したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪^{わる}い奴^{やつ}で、よく偽筆^{ぎひつ}
へ贗落款^{にせらっかん}などを押^おして売^うりつけるそうだから、全^{まった}く君^{こと}の事^{でたらめ}も出鱈目^{ちが}に違^{ちが}いがない。君^{かけもの}に懸物^{かけもの}
や骨董^{こつどう}を売^うりつけて、商売^{しょうばい}にしようと思^{おも}ってたところが、君^とが取り合^あわないで儲^{もう}けがないも
のだから、あんな作^{つく}りごとをこしらえて胡魔化^{ごまか}したのだ。僕^{ぼく}はあの人物^{じんぶつ}を知ら^しなかったので君
たいへん^{たいへん}失敬^{しっけい}した勘弁^{かんべん}したまえと長々^{ながなが}しい謝罪^{しゃざい}をした。

おれは何^{なん}とも云^いわずに、山嵐^{つくえ}の机^{うえ}の上^{いっせん}にあった、一錢五厘^{ごりん}をとって、おれの蝦蟇口^{がまぐち}のなかへ
入れた。山嵐^いは君^ひそれを引き込^ひめるのかと不審^{ふしん}そうに聞^きくから、うんおれは君^{おご}に奢^{おご}られるの
が、いやだったから、是非^{ぜひ}返^{かえ}すつもりでいたが、その後^ごだんだん考^{かんが}えてみると、やっぱり奢^{おご}
ってもら^{ほう}う方がいいようだから、引き込^ひますんだと説明^{せつめい}した。山嵐^{おお}は大きな声^{こえ}をしてアハハ
ハと笑^{わら}いながら、そんなら、なぜ早^{はや}く取^とらなかつたのだと聞^きいた。実は取^とろう取^とろうと思^しって
たが、何^{みょう}だか妙^{みょう}だからそのままにしておいた。近^{きん}来^{らい}は学校^{がっこう}へ来^きて一錢五厘^{ごりん}を見るのが苦^くにな
るくらいいやだったと云^いったら、君^まはよっぽど負^おけ惜^{つよ}しみの強^{おとこ}い男^{おとこ}だと云^いうから、君^まはよっ
ぽど剛情^{ごうじょう}張^ばりだと答^{こた}えてや^あった。それから二人^{ふたり}の間^{あいだ}にこんな問答^{もんどう}が起^{おこ}った。

「君^いは一^い体^{たい}どこの産^{さん}だ」

「おれは江^え戸^どっ子^こだ」

「うん、江^え戸^どっ子^こか、道^ど理^りで負^おけ惜^{つよ}しみが強^{おとこ}いと思^しった」

「きみはど^どこだ」

「僕^あは会^あ津^{いづ}だ」

「会^あ津^{いづ}っばか、強^{ごうじょう}情^{わけ}な訳^{きょう}だ。今^い日^{にち}の送^{そう}別^{べつ}会^{かい}へ行^いくのかい」

「行^いくとも、君^{きみ}は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思ってるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。なるほど戸っ子の軽跳な風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちょっとおれのうちへお寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に気毒でたまらなかったが、いよいよ送別の今日となったら、何だか憐れっぽくって、出来る事なら、おれが代りに行ってやりたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇って、一番赤シャツの荒肝を挫いでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭としてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知っている。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云ったら、山嵐は君はだれを捕まえても馬鹿呼わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云ったじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは腑抜けの呆助だと云ったら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遥かに字を知っていない。会津っぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職する考えだなと云った。免職するつもりだって、君は免職になる気かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張った。どうしていっしょに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わったと話したら、大將大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がっているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまってしまうと、校長へ二度、赤シャツへ一度行って談判してみたが、どうすることも出来なかったと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があった時、断然断わるか、一応考えてみますと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席に許諾したものだから、あとからお母さんが泣きついても、自分が談判に行っても役に立たなかったと非常に残念がった。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云ったら、無論そうに違いない。あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道を拵えて待ってるんだから、よっぽど奸物だ。あんな奴にかかっては鉄拳制裁でなくっちゃ利かないと、瘤だらけの腕をまくってみせた。おれはついだから、君の腕は強そうだな柔術でもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちょっと攫んでみろと云うから、指の先で揉んでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐると皮のなかで廻転する。すこぶる愉快だ。山嵐の証明する所によると、かんじん綱りを二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云ったら、出来るものか、出来るならやってみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲ってやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云った。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こっちの落度になるからと、分別のありそうな事をつけた。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになって重みがなくていけない。そうして、きまった所へ出ると、急に溜飲が起って咽喉の所へ、大きな丸が上がり来て言葉が出ないから、君に譲るからと云ったら、妙な病気だな、じゃ君は

ひとなか くち き こま なに こた
人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えて
おいた。

じかん いっしょ かいじょう い かしんてい こ こ
そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭とって、当地
だいいつとう りょうりや いちど あし い かろう やしき か
で第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買
い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸からして厳めしい構えだ。家老
の屋敷が料理屋になるのは、じんばおり ぬ なお どうぎ よう
陣羽織を縫い直して、胴着にする様なものだ。

ふたり つ ころ にんず たいがいそろ ごじゅうじょう ひろま ふた みつ にんげん かたまり で き
二人が着いた頃には、人数ももう大概揃って、五十畳の広間に二つ三つ人間の塊が出来
ている。五十畳だけに床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五畳敷の床とは比較
にならない。しゃく と にけん みぎ ほう あか もよう せともの かめ す
尺を取ってみたら二間あった。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据え
て、その中に松の大きな枝が挿してある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立
つても散る気遣いが無いから、ぜに かか
銭が懸らなくて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだ
と博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里ですと云った。伊万里だって
瀬戸物じゃないかと、云ったら、博物はえへへへと笑っていた。あとで聞いてみたら、瀬戸
で出来る焼物だから、やきもの とうき
瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器の事を瀬戸物とい
うのかと思っていた。おも まんなか かけもの かお
床の真中に大きな懸物があって、おれの顔くらいな大ききな字が
にじゅうはち へ た まず かんがく せんせい
二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味いから、漢学の先生に、なぜあ
なまずいものを麗々と懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋とって有名な
しょか もの おし
書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思っている。

しょき かわむら ちゃくせき い はしら よ つごう ところ
やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があって寄りかかるのに都合のいい所
へ坐った。すわ かいおく かけもの まえ たぬき はおり はかま ひだり あか おな
海屋の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴
で陣取った。じんど みぎ ほう しゅじんこう せんせい にほんふく ひか
右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控えている。おれ
は洋服だから、ようふく かしこまるのが きゅうくつ あぐら とな たいそうきょうし くら
かしこまるのが窮屈だったから、すぐ胡坐をかけた。隣の体操教師は黒
ずぼんで、ちゃんとかしこまっている。しゅうぎょう つ
体操の教師だけにいやに修行が積んでいる。やがて
お膳が出る。ぜん で とくり なら かんじ た いちごんかいかい じ の
徳利が並ぶ。幹事が立って、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シ
ャツが立つ。た そうべつ さんにともう あわ くん
ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、
りょうきょうし こうじんぶつ こと ふいちょう こんかいさ ざんねん がっこう
良教師で好人物な事を吹聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としての
みならず、こじん お いったん じょう つごう せつ てんじん
個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご
きぼう いた かた い み うそ そうべつかい ひら
希望になったのだから致し方がないという意味を述べた。こんな嘘をついて送別会を開い

て、それでちっとも恥かしいとも思っていない。ことに赤シャツに至って三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるとまで云った。しかもそのいい方がいかにも、もっともらしくって、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極ってる。マドンナも大方この手で引掛けたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側に坐っていた山嵐がおれの顔を見てちょっと稲光をさした。おれは返電として、人指し指でべっかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍った。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くとここによれば風俗のすこぶる淳朴な所で、職員生徒ことごとく上代樸直の気風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、その地の淑女にして、君子の好迷となるべき資格あるものを扨んで一日も早く円満なる家庭をかたち作って、かの不貞無節なるお転婆を事実の上において慚死せしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩こうと思ったが、またみんながおれの面を見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起った。先生はご鄭寧に、自席から、座敷の端の末座まで行って、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会をお開き下さったのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いに難有く服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧のほどを願います。とへえつく張って席に戻った。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭に恭しくお礼を云っている。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心から感謝

しているらしい。こんな^{せいじん まじめ}聖人に真面目にお礼を云われたら、^{き どく}気の毒になって、^{せきめん}赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に^{きんちょう}謹聴しているばかりだ。

^{あいさつ す}挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音^{おと}がする。おれも真似^{まね}をして汁^{じゆ}を飲んでみたがまずいもんだ。^{くちとり かまぼこ}口取に蒲鉾はついてるが、^{ぐろ ちくわ できそこ}どす黒くて竹輪の出来損ないである。^{さしみ なら あつ まぐろ き み なま く おな こと}刺身も並んでるが、厚くって鮭の切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣^{とな}り近所^{きんじよ}の連^{れんちゆう}中はむしゃむしゃ^{うま}旨そうに食っている。大方江戸前^{おおかたえどまえ}の料理^{りょうり}を食った事がないだろう。

そのうち爛徳利^{かんどくり ひんばん おうらい はじ}が頻繁に往來し始めたら、四方^{しほう きゆう にぎ}が急に賑やかになった。野だ公^{の こう}は恭^{うやうや}しく校長^{こうちよう}の前へ出て^{まえ}盃^でを頂^{さかづき}いてる。いやな奴^{いただ}だ。うらなり君^{やつ}は順^{くん}々に献酬^{けんじゆん}をして、一巡^{いちじゆんめぐ}周るつもりとみえる。はなはだ^{くろう}ご苦労である。うらなり君^{くん}がおれの^き前へ来て、一つ^{ひとつ}頂戴^{ちようだい}致^{いた}しましょうと袴^{はかま}のひだを正^{ただ}して申し込まれたから、おれも窮^{きゆう}屈^{くつ}にズボンのままか^ましこまって、一盃^{いっばい}差し上げた。せっかく^さ参^まって、すぐお別れになるのは残念^{ざんねん}ですね。ご^ご出立^{しゅつたつ}はいつです、是非^ぜ浜^{はま}までお見送り^{みおく}をしましょうと云^いったら、うらなり君^{くん}はいえご用多^{ようおほ}のところ^{ところ}決^{けつ}してそれには及^{およ}びませんと答^{こた}えた。うらなり君^{くん}が何^{なん}と云^いったって、おれは学校^{がっこう}を休^{やす}んで送^{おく}る^き気^きでいる。

それから一時間^{いちじかん}ほどするうちに席上^{せきじゆう}は大分^{だいぶん}乱れて来る。まあ一杯^{いっばい}、おや僕^{ぼく}が飲^のめと云^いうのに.....など^なと呂律^{ろれつ}の巡^{まわ}りかねるのも一人二人^{ひとりふたり}出来て来た。少^{しょう}々^{しょう}退屈^{たいくつ}したから便所^{べんじよ}へ行^いって、昔^{むかし}風^{ふう}な庭^{にわ}を星明^{ほしあか}りにすかして眺^{なが}めていると山嵐^{やまあらし}が来た。どうださっきの演説^{えんぜつ}はうまかつたろう。と大分^{たいぶん}得意^{とくい}である。大賛成^{だいさんせい}だが一ヶ所^{いっかしよ}気^きに入^いらないと抗議^{こうぎ}を申し込んだら、どこが不賛成^{ふさんせい}だと聞^きいた。

「美しい顔^{うつく}をして人^{かお}を陥^{ひと}れるようなハイカラ野郎^{おとしい}は延岡^{やろう}に居^{のべ}らないから.....と君^おは云^{きみ}ったろう」

「うん」

「ハイカラ野郎^{ふそく}だけでは不足^{ふそく}だよ」

「じゃ何^{なん}と云^いうんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知ってる。それで演舌が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩のときに使おうと思って、用心のために取っておく言葉さ。演舌となっちゃ、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やってみたまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側をどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら駆け出して来た。

「両君そりゃひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃さない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引っ張って行く。実はこの両人共便所に来たのだが、酔ってるものだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引っ張るのだろう。酔っ払いは目の中る所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまうだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引っ張って来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際へ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を綺麗に食い尽して、五六間先へ遠征に出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人は行って来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じっとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣えていた、赤シャツが急に起って、座敷を出にかかった。向うからは行って来た芸者の一人が、行き違いながら、笑って挨拶をした。その一人は一番若くて一番綺麗な奴だ。遠くで聞えなかったが、おや今晚はぐらい云ったらしい。赤シャツは知

らん顔^{かお}をして出て行^でったぎり、顔^いを出さなかつた。大方校^{おおかたこうちょう}長のあとを追懸^{おい}けて帰^{かえ}ったんだろ
う。

芸^ぎ者が来^きたら座敷^{ざしき}中^{ちゆう}急^{きゆう}に陽^{やう}気^きになつて、一^{いち}同^{どう}が関^{かん}の聲^{こゑ}を揚^あげて歓^{かん}迎^{げい}したのかと思^{おも}うくらい、
騒^{そう}々^{ぞう}しい。そうしてある奴^{やつ}はなんこを攫^{つか}む。その聲^{こゑ}の大き^{おお}な事^{こと}、まるで居^い合^{あい}抜^{ぬき}の稽^{けい}古^このよう
だ。こつちでは拳^{けん}を打^うつてる。よつ、はつ、と夢^{むちゆう}中^{ちゆう}で両^{りやう}手^てを振^ふるところは、ダーク一^{いち}座^ざの
操^{あやつりにぎょう}人^{じん}形^{ぎやう}よりよつぽど上^{じやう}手^ずだ。向^{むかひ}の隅^{すみ}ではおいお酌^{しゃく}だ、と徳^{とく}利^りを振^ふつてみて、酒^{さけ}だ酒^{さけ}だ
と言^いひ直^{なお}している。どうもやかましくて騒^{そう}々^{ぞう}しくつてたま^{ても}らな^ちい。そのうちで手^て持^{もち}無^ぶ沙^さ汰^たに下^{した}
を向^むいて考^{かんが}え込^こんでるのはうらなり君^{くん}ばか^かりである。自^じ分^{ぶん}のた^そめ^うに送^{そう}別^{べつ}会^{かい}を開^{ひら}いてくれたの
は、自^{てん}分^{にん}の転^{おし}任^{にん}を惜^{おし}んでくれるんじやない。みん^のな^あが酒^{あそ}を呑^{ひと}んで遊^{あそ}ぶた^めだ。自^{ひと}分^{ひとり}独^{ひとり}りが手^て
持^{もち}無^ぶ沙^さ汰^たで苦^{くる}しむた^めだ。こ^のん^なな送^{ほう}別^{ほう}会^{かい}なら、開^{ひら}いてもら^わない方^{ほう}がよ^よつ^つぽ^ぽどま^まし^した。

しばらくしたら、めい^{どうまごえ}めい^だ洞^{なに}間^{うた}声^{はじ}を出^まして何^まか唄^きい始^{ひとり}めた。おれの前^{げい}へ来^{しや}た一^{ひとり}人^{げい}の芸^{しや}者^{しや}が、
あ^んた、なん^ぞ、唄^{しやみせん}いなは^かれ、と三^{さん}味^み線^{せん}を抱^{かか}えたから、おれは唄^きわない、貴^き様^{さま}唄^唄つてみ^みろと云^い
つたら、金^{かね}や太^{たい}鼓^こでねえ、迷^{まい}子^ごの迷^{さん}子^{たろう}の三^{さん}太^た郎^{ろう}と、ど^んど^こ、ど^んのち^ちゃん^ちき^きりん。叩^{たた}いて
廻^{まわ}つて逢^あわれるものならば、わたしなん^ぞも、金^{かね}や太^{たい}鼓^こでど^んど^こ、ど^んのち^ちゃん^ちき^きりん
と叩^{たた}いて廻^{まわ}つて逢^あいたい人^{ひと}がある、と二^ふた息^{いき}にう^うたつて、お^おし^しん^んどと云^いつた。お^おし^しん^んどな
ら、も^もつと楽^{らく}なものをや^やればい^いいの^に。

すると、いつの間^まにか傍^{そば}へ来^{すわ}て坐^のつた、野^のだ^が、鈴^{すず}ちゃん逢^{おも}いたい人^{ひと}に逢^あつたと思^{おも}つたら、す
ぐお帰^{かえ}りで、お^お気^きの毒^{どく}さま^{さま}み^みたよう^{よう}でげ^げすと相^あ変^あら^らず^ず嘸^あい^あか^かわ^わは^はな^なか^かことばづ^づか^かし
りまへんと芸^ぎ者^{しや}はつ^つんと済^すました。野^のだは頓^{とん}着^{じゃく}なく、た^たま^ま逢^あいは逢^あいながら……と、い
やな声^{こゑ}を出^でして義^ぎ太^た夫^{ふう}の真^ま似^ねをやる。お^おき^きな^なは^はれ^れやと芸^ぎ者^{しや}は平^ひ手^てで野^のだの膝^{ひざ}を叩^{たた}いたら野^のだは
恐^{きよう}悦^{えつ}して笑^{わら}つてる。この芸^{あか}者^{しや}は赤^{あか}シャ^あツ^いに揜^あい^いさ^さつ^つや^やつ
だもお^もめ^めで^でたい者^{もの}だ。鈴^{ぼく}ちゃん僕^きが紀^{くに}伊^いの国^{おど}を躑^{ひと}るから、一^{ひと}つ弾^ひいて頂^{ちゆう}戴^{だい}と云^いい出^いした。野
だはこの上^うま^まだ躑^きる気^きでいる。

向^{むか}うの方^{ほう}で漢^{かん}学^{がく}のお爺^{じい}さん^はが齒^{くち}のない口^{くち}を歪^{ゆが}めて、そ^きりや聞^きえ^えませ^せん伝^{でん}兵^{べい}衛^{ゑい}さん、お前^{まえ}とわ
たしの中^{なか}は……とま^までは無^ぶ事^じに済^すましたが、それ^{それ}から？ と芸^ぎ者^{しや}に聞^きいてい^いる。爺^{じい}さんなん
て物^{もの}覚^{おぼ}えのわ^わるいもの^{もの}だ。一^{ひとり}人^{ひとり}が博^{はく}物^{ぶつ}を捕^{つら}ま^まえて近^{ちか}頃^{ごろ}こ^こない^{ない}なの^のが、で^でけ^けま^まし^した^たぜ、弾^ひいて
み^みま^まほう^{ほう}か。よう聞^かいて、い^いな^なは^はれ^れや——花^か月^{げつ}巻^{まき}、白^{しろ}い^いリ^りボ^ぼンのハイ^あカ^{たま}ラ^の頭^の、乗^のる^るは

じてんしゃ はんか えいご
自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄うと、博物は
なるほど おもしろ い かんしん
なるほど面白い、英語入りだねと感心している。

やまあらし ばか おお こえ
山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者と呼んで、おれがけんぶ
けと号令を下した。芸者はあまりらんぼう と へんじ
委細構わず、ステッキを持って来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演
じている。ところへ野だがすでに紀伊の国を済まして、かっぱれを済まして、たな だるま
済して丸裸の越中 禪 一つになって、しゅろぼうき こわき か こ にっしんだんぼんはれつ
……と座敷中練りあるき出した。まるできちが
……と座敷中練りあるき出した。まるで気違いだ。

おれはさっきからくる 苦しそうに はかま ぬ ひか
が、なんぼ自分の送別会だって、えっちゅうふんどし はだかおどり はおり がまん ひつよう
あるまいと思ったから、そばへ行って、古賀さんもう帰りましょうと退去を勧めてみた。す
るとうらなり君は今日は私 の送別会だから、私が先へ帰っては失礼です、どうぞご遠慮なく
と動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様
を ご覧なさい。気狂会です。さあ行きましょうと、すす むり ざしき で
かるところへ、野だが ぼうき ふ ふ しんこう き
談判だ。帰せないと 箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさっきから かんしゃく おこ
ろだから、日清談判なら 貴様はちゃんちゃんだろうと、いきなり げんこつ あたま
と喰わしてやった。野だは二秒の間 さいだん あいだどつき ぬ てい
はひどい。お撲ちになったのは情ない。この吉川をご打擲とは恐れ入った。いよいよもつ
て日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから やまあらし なに そうどう はじ
たと見てとって、けんぶをやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり くびすじ
と攫んで引き戻した。日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横
に振ったら、ねじ たお し とちゅう わか
うちへ帰ったら じゅういちじす
うちへ帰ったら十一時過ぎだった。